# 読者ふれあいページ

「こちら虹」は楽しかったこと、感動したことを教えてください。「お助け倶楽部」アイデアやお知恵をお寄せください。紙上電話番号を明記ください。電話は土、日曜

## 混迷・生きる　教えの庭から

## 「包むもの」と「包まれるもの」

出雲市斐川町・仁照寺住職
江角　弘道

命（イノチ）の語源について、イキノウチ（息内）の約であると辞書にありました。

息内という言葉は、明快にイノチについて語っています。つまり人間は、生まれるとき「オギャー」という声で息を吐き（呼）、死ぬときは「息を引き取る」（吸）のです。従って、生きていることは、呼吸をしている息のある内。人間は、一息ごとに生きています。

今、元気に生きている人でも、急に亡くなることがあります。自分に分かるのは「一息、一息」で生きている「今」しかありません。だから、幸せになるのも「今」であり、何年か先ではありません。

空気は、私たちを包んでいて、それが私たちの呼吸となって「いき」をするとき、「いき」る根源となり、いわゆる「生きる」ことは「いき（呼吸）する」ことであり、「いのちの根源」と連なっています。

私たちは、空気に「包まれるもの」とも言えます。

空気の組成は、地上で酸素が21％、窒素が78％で、残りの1％が希ガスです。地球誕生時には、空気はありませんでしたが、6億年前ごろからこの割合になり、現在まで、ほとんど変化していないそうです。

もし酸素の割合が少なくなったら、人間は空気の希薄な高山では、高山病になる例で分かるように、呼吸器系の病気になります。そして人類は、呼吸困難に陥り自滅することになります。

また、逆に酸素の割合が増加したら、ほんの少しの火花で、発火します。だから、風に揺れる木どうしの摩擦で、摩擦熱が発生し、すぐに発火してしまうため、地球上のものは、すべて焼き尽くされてしまうことになるでしょう。

そして、この大切な空気は、緑色植物が光合成により、生成してくれています。自然は、人類を生かすために、恒常的な空気の割合を保っていてくれています。

ここに、山田無文老師が詠んだ歌があります。老師は、花園大学学長や妙心寺派管長などをされた方で、修行時代に結核に侵され、療養をしていたとき、障子を開けて、濡れ縁に出たそうです。その時、一陣の風を感じ、次の歌を詠みました。

「大いなるものに抱かれてあることを、今朝吹く風の涼しさに知る」

このとき、老師は、「いったい風とは何だろう」と考え、それは、「空気が動いているんだ。空気があったんだ」と気づいたと同時に、感激の涙を流したそうです。

さらに、「1日といいたいが5分間、いや1分間でもそれがなくては生きていられない大切な空気、そんな大切な空気に、生まれおちてから今日まで、夜となく昼となく、やすみなく抱かれておったのです。働いているときも遊んでいるときも、寝ているときも、こちらは空気などと思ったこともないのに、空気のほうはわたくしをわすれずに、しっかりと抱きしめていてくれたのです」（「わが精神のふるさと」より）と述べています。

老師は、空気に「大いなるもの」としての存在を自覚され、母が子を抱くように、空気に抱かれていると感動されました。「大いなるもの」とは、「いのちの根源」であり、阿弥陀（量り知れないいのち）様です。

私たちは、最初から阿弥陀様の中に包まれているとはいえ、誰もが気づかずに、しかもその中で生かされています。

●●● いやし ●●● 安らぎ ●●● こころ ●●●